

リバタリアンの経験の範囲を探る：中間報告

太田紘史 (Koji Ota) ・ 飯島和樹 (Kazuki Iijima)

新潟大学人文学部 ・ 玉川大学脳科学研究所

自由意志が決定論と両立可能かどうかについて、哲学者らの答えは様々である。この問題について論じるうえで哲学者らが参照してきたものの一つは、経験である。デカルトによれば、リバタリアン的な自由意志が心のなかに含まれることは明証的に見て取れるのであり、彼はこれを根拠として、我々がリバタリアン的な自由意志を持つと論じた。これと同様の検討は、二十世紀以降の何人かの哲学者らによっても行われており、ただしそれらの検討では経験とそれに対応する実在の問題が区別されている。すなわち、実際にリバタリアンの自由が存在するかどうかは別として、少なくともリバタリアン自由が経験されてはいると、しばしば論じられてきた。しかしこのミニマルな提案すら否定されることがある。ヒュームやそれに連なる現代の両立論者らによれば、そうした経験は存在せず、自由意志はせいぜい両立論的なタイプのものとして経験されるにとどまる。

こうした問題に対して Deery らは、自由意志の経験に関する主観的報告を収集するという実験研究を通じたアプローチを採用している (Deery et al. *Oxford Studies in Agency and Responsibility*, 1: 126–50, 2013)。彼らの実験において被験者は、まず選択課題において別様に行為することができると感じるかどうかを問われ、これに肯定的に答えた被験者はさらに次のように問われた：決定論が正しいければその経験には誤ったところがあるか。結果、誤っているところがあると被験者は答える傾向にあった。この結果は、人々が経験する選択が非両立論的であること、すなわち人々はリバタリアン的な他行為可能性を経験していることを示唆するものである。

彼らの研究はしかし、自由意志に関連する行為者性として他行為可能性だけを扱っている点で限界がある。たしかに他行為可能性の概念は自由意志論争において重要な役割を果たしてきたが、これまでの多くの議論を通じて、他行為可能性は自由意志にとって必須ではないともしばしば論じられてきた。その代案となる行為者性として取り上げられてきたのは、よく知られるとおり、源泉性とコントロール可能性である。これらの行為者性についてもリバタリアン的な経験が享受されているかどうかは、未だ調べられていない。

もう一つの問題は、方法論的なものである。Deery らによる実験研究は、他行為可能性が決定論と両立可能かどうかに関する経験ではなく、それに関する信念を追跡しているおそれがある。被験者に対して、別用に行為することができると感じるかどうかを単に問うても、被験者は他行為可能性に関する信念を問われていると理解するかもしれない。自由意志と決定論の両立可能性についての信念に関する調査を超えて（そうした調査はいまや多数存在する）、自由意志の経験がリバタリアン的なものかどうかを調査するためには、こうした曖昧性を排除するための工夫が必要である。またそうした工夫を導入すれば、経験と信念の相互作用に関する探究も可能になる。とりわけ自由意志の経

験が認知的に侵入可能であるという可能性がこれまで指摘されており (e.g. Deery, *Philosophical Explorations*, 18(1): 2–19, 2015)、仮にそうした侵入が起こりうるのであれば、実験環境下でも経験と信念が測定上相関することが予測される。

以上の背景のもとで今回我々は、自由意志の経験に関する主観的報告をプローブするため、Deery らの手法を取り込んで拡張した新たなオンライン実験を行なった。この実験は、モニター上の三次元仮想空間内で選択課題を被験者に対して与え、他行為可能性だけでなく源泉性とコントロール可能性の経験に関しても主観的報告を収集するものである。またそれにあたって我々は、経験を信念から区別するように被験者に対して明示的に教示する手続きを導入するとともに、自由意志や決定論に関する信念を測定するための既存の指標およびシナリオを用いることで、主観的に報告された経験とそれらの信念の間の関連性について調べた。

結果として判明したところでは、第一に、選択課題において主観的に報告された他行為可能性の経験はリバタリアンのようなものであった。これは Deery らの実験結果を再現するものである。第二に、源泉性およびコントロール可能性についても、報告された経験はリバタリアンのようなものであった。これは自由意志に関連しうる行為者性の経験が一貫してリバタリアンのであることを示唆する。第三に、報告された経験のリバタリアンの性格は、自由意志や決定論に関する信念の差異に応じて異ならなかった。この結果は先述の認知的侵入可能性に関する予測に反するものであり、経験のリバタリアンの性格は信念による影響を排除する程度にロバストであることが示唆される。第四に、しかしそれとは異なる部分において信念と経験の相互作用が示唆された。すなわち、自由意志の存在をより強く信じる傾向にある被験者ではそうでない被験者に比べて、選択肢が1つしかない状況下においても一部の種類の行為者性（源泉性とコントロール可能性）の経験を報告する傾向性が高かった。

我々は以上の結果および示唆を、関連しうる既存のいくつかの経験的研究および理論的研究と比較するとともに、本研究の限界および今後の展望について検討する。